この世界は幾千年もの間、魔王の支配下にある。
美しいはずの大地は賊やモンスターがうろつき、
魔王軍の虐殺や略奪も絶えない。
これまで人類を救うために立ち上がった者たちは
ことごとく魔王の軍門に下ったと歴史に残されており
人々にはあきらめが広がっていた。
そんな時、肩に不思議な模様を持って生まれたのが
僕の幼馴染のラナだった。
赤い花の蕾のようなそれは
幼いころから正義感の強かった彼女に
何かしらの運命を感じさせていた。

「ラナよ。ついにその日が来たか
大きくなったのう…」
「長老様、ぼくの肩の模様について教えてください」
「うむ…その紋章は特別な力を持っておる。
魔王を打ち倒す力を。」
「ぼくが…こ…の紋章が力を？
でも、今のぼくには何も感じません…」
「今はまだ眠っておる。
蕾をかたどったその紋章が紅く大きく花開くとき
真の力が宿るとされておるのじゃ」
「蕾が開く…？
そのためにはどうすれば…？」

「その紋章には4つの試練がある。
一つ、欲望に抗うこと
一つ、人を騙さぬこと
一つ、人を助けること
一つ、鍛錬を欠かさぬこと
快楽や利己を貪る人間の欲望に抵抗すること…
全ては「禁欲」に繋がる試練じゃ
これを実践すれば
紋章はいずれ真の姿を現すじゃろう。」
「禁欲…」
「もし堕落の道を選べば
紋章は次第に力を失っていく…
その意味はわかるな？」
「―はい。肝に銘じます」
「ラナ、お前は幼い頃から真面目で正義感の強い子じゃったな。
普段通りでよい。きっと神は見ておられるぞ。」

「そして、蕾の紋章が花開いた時
"最後の契り"が必要となると言われておる」
「最後の契り…？それは…？」
「…それが私にはわからぬのじゃ。
東の山麓の村に住む大預言者を尋ねなさい。
私の姉じゃ。あれが言い伝えの全てを知っておる。」
「わかりました。行ってきます！」
「話は聞いておったなロイドよ。
―ラナを頼んだぞ」
「はい。長老様。」

「――一緒に来てくれるんだね。ロイド」
「当然。子供のころから一緒だったじゃないか
ラナと一緒に戦うために僕は鍛えたんだ」
「そうだったね…長い旅になるけど、お互い生きて帰ろう」
「剣も魔法も使えるラナは身軽に戦えた方がいい。
僕はラナの盾になる。防御は任せてくれ。
僕たちは二人で一つだ」
「うん。キミと二人なら頼もしいよ。
じゃあ、行こうか！」
僕達二人は言い伝えを信じ、
紋章のさらなる謎を解き明かし
世界を救うための旅に出たのだった。

「後ろ頼んだよ！」
「任せろ！こっちだモンスターども！」
剣と魔法の使い手であるラナは
身軽さを生かして敵を切り捨てていく。
その間、僕はモンスター達を惹きつけ
彼女の盾となる
お互いの強みを生かして
二人で一体となり
僕たちの旅は危なげなく進んでいた

「この辺をうろついてたモンスターは一掃したよ。しばらくは安全だと思う」
「これで子供達も安心して歩けます…勇者様、本当にありがとうございました！そちらの方も―」
「当然のことをしたまでです」
「あの…少ないですがお礼の印です。どうかこれをお受け取りください…」
「いや、礼には及ばないよぼく達の経験にもなるんだ。それに、モンスターに食料を奪われて困ってたんだよね？そのお金で子供達にお腹いっぱい食べさせてあげて。」
「ああ…！なんて慈悲深いお方…本当に感謝します。どうか神のご加護を」

僕たちは深く会釈して去る村人を見送った…
「―それにしても、今日も人助けで一日が終わっちゃったな」
「うん。だけど、困った人を見て放ってはおけないよ子供達が襲われたと聞いたら尚更ね。」
そう言われちゃ返す言葉もないが…おかげで僕たちの旅がなかなか進まないのも事実だ
「昨日倒した盗賊だって、村の人達を嘘で騙して…絶対許せないよ」
（まぁ…ラナらしいや…）
「そうだな…ラナの言うとおりだ人を救うのも紋章のためだしな」
これぐらいのヤツじゃなきゃ、魔王を倒すために立ち上がるわけもない。
このラナの芯の強さこそ僕が彼女を信頼する所以でもあるのだ。

「ありがとう。キミが一緒だからぼく、頑張れてる気がする」
「よ、よせよ…どうしたんだよ急に」
「本心だよ。
ぼく、こう見えても結構人見知りなの知ってるでしょ。
やっぱり近くに気心知れた人がいてくれると心強いんだ」
「はは…そうだったな。最後まで付き合うよ。」
「ありがとう。ぼく達は二人で一つ…だもんね」
そう、僕たち二人は幼馴染で、最高の相棒だ

「とりあえず、今日はもう日が暮れる。
宿を探して、次の街を目指すのは明日にしようか」
「そうだな。そうしよう」
こうして僕たちは風呂付きの宿に宿泊したのだった―

そして夜ー
「ん…と…あれ？」
装備のメンテナンスをしていたのだが
工具が一つ見当たらない。ラナのカバンに入ってたかな…
「まだ寝るような時間じゃないし…
聞きに行ってみるか」
僕はラナがいる二階の部屋に向かった。

「おーいラナ～」
何の気なしに部屋のドアを開けると
とんでもない光景が目に飛び込んできた
「わわっ！
の、ノックぐらいしてよっ！」
「あっ、いや、ごめん！
ラナに工具貸してたかなって…」
「と、とにかく一回出てってってば！
後で持ってくからっ！」
「わ、わかった！失礼しました！」
ついノックもせず入ってしまった…しかも最悪のタイミングで…
幼馴染とはいえ気を遣わなすぎた。

そして―
ラナが顔を赤らめながら僕の部屋にやってきた
「…はい、確かに借りてたよっ」
「あ…で、ですよね…はは…」
こっちも気まずいけど
さすがのラナもあんなところ見られたのは
恥ずかしかったかな…
「まったくキミは…これ二回目だからね」
ラナがため息交じりにそういった
そういえば前も一度似たような事があったっけ
「ホントごめん！
でも、この前は何も見えてなかったし―」

「そういう問題じゃないよ、もう！」
「はい…すいません…」
怒られた。確かにデリカシーのない発言だった。
こっちはもう平謝りだ
少しの間があって、ラナがちょっと自信なさげに呟いた
「―ボクだってこう見えて
一応女のコなんだからね。少しは気を使ってよ」
「そ、そうだよな。子供のころから見てるから
気を抜いちゃってさ…気を付けないとな。」
「む…どうせいつも男の子に間違われてましたよっ」
「お、おい拗ねるなよ」
「おやすみ！」
ラナはプンプンして部屋を出ていった。

「傷つけちゃったかな…」
確かにラナは子供のころから気が強くて
「悪ガキと喧嘩ばかりしてる女の子」って
村でも有名だったんだよな
逆に気弱だった僕は
イジメられてる所を彼女に助けられて…
少しでも強くなろうと決めたのはあの時だっけ。
男みたいだと揶揄する奴もいたが、
幼馴染だった僕は知っていた。
彼女の優しさも、愛らしさも。
そして笑顔が弾けるとびきり可愛い事も。

一緒に旅立つことを決めたのも
ラナのことが好きだったから…
一人で戦わせる事なんて出来なかったからだ
僕は彼女と最後まで行動を共にする。
たとえ「最期」までだとしても…だ。
起きたら改めて謝ろう…
あと、ラナの好きなプリンの
美味しい店でも探しておこう
そう思って僕はベッドに潜った

「……」
やばい…目を閉じるとさっきのラナの下着姿が目に浮かんでしまう
（あんなに成長してたんだな…昔は胸なんてぺたんこだったのに…）
（パンツは白だったな…女の子らしいやつだった…）
やっぱりラナも女子なんだと改めて思わされる。
正直さっきから勃起が止まらないのだ…
「オナニーは我慢だ…堕落に抗うんだ…」
僕は暫く月夜を眺めて
気持ちを落ち着けてから眠りについた

そして次の日ー
「あれ？ラナ、なんかいつもと違うな」
気づくと彼女の髪には大きな髪飾りが付いていた。
「やっと気づいた？
今日の朝、宿の近くのお店で買っておいたんだ
キミはボクのことを男子だと思ってそうだからね」
「い、いやそんなことは…はは…
良く似合ってるよ。うん」
（うーん、やっぱり昨日のこと気にしてたか？
しかし、これはカワイイぞ…）

ラナをまじまじと眺めてしまう
「な、なんだよぅ…変だと思ってるでしょ」
「いやいや…しみじみ思ったよ普通に似合ってるって」
「本当？…なら良かった」
時々こういう女の子っぽいとこを見せるからこっちも意識しちゃうよなぁ
「その…昨日はごめんな。怒らせちゃって…反省したよ今後気を付けないとな。」

「ううん。ボクもちょっと強く言いすぎた。
そんなに怒ってないよ」
「お詫びと言っちゃあなんだけど、
今日の宿を取った後、カフェでも行こうか。
美味いプリンが食べられる店、探しとくよ」
「プリン…しばらく食べてないなぁ…」
「大好きだろ？僕もたまには甘いもの食べたいし
ポケットマネーから奢るよ」
「うん…気持ちは嬉しいんだけど…
やっぱり我慢する。」

「ああ…これも堕落に繋がるかな？」
「今は自分の快楽のために生きちゃダメなんだ。
そして人のために尽くそうと思う。
全ては紋章の力を引き出すため！」
「そうか。そうだな。
ラナがそういうなら僕もそうする」
「ーありがとうロイド。一緒に頑張ってくれて。
それじゃあ、次の街を目指して出発だ！」
あくまでこの世界を救うのはラナなのだ。
僕はこの子の力になりたい…だから行動もいつも一緒だ。
改めてそう心に決めて旅をつづけたー

旅の道中…
「ん…なんだろ。さっきから肩のあたりが熱いような…」
「どうした？―あっ！」
ラナがマントをまくると見慣れない紋章が現れた
「紋章の形が少し変わってきてる…。
―これは…」
「ああ。きっと、これまでの行いが実を結んできてるんだよ」
「だといいけど…とにかくこの調子で、
長老様が言ってた村まで急ごう。」
「そうだな！ラナにどんな力が宿るか楽しみだ。」

通り道で見かけた小屋で
若い女性に声をかけられた
「貴女様はもしかして
勇者ラナ様…」
「ああ。いかにも。」
「―私はオフィーリアと申します。
勇者様のお噂はここにも届いております。
どうか私達をお助け下さい」
道すがらの人助けが噂を呼んでいるらしい
「凄いなラナ。有名人だ」
冗談めかしてそう言うとラナは少しはにかんだ
「やめてよロイド。
―それで、困り事は？」

「はい…私と夫の間に生まれた子は生まれ付きの病で、
余命幾ばくも無いようなのです。
貧しい私たちは医者に託す事さえ出来ません…」
「なんてこと…」
「しかし、この病気を直せる奇跡の薬が
あの山奥にある遺跡に眠っていると聞きました。
夫は一人で向かうと言いますが、私は心配です。
勇者様、どうかお力添えを」
「もちろんだよ。
その山なら丁度ボク達も向かってる場所だ
でも一人で行くのは危険すぎる」
（どうでもいい事だがこの人のフードのでっぱりが気になる。
髪飾りにしては大きいが…）
「ね、ロイド。いいよね？」
「あ、あぁ。当然。」

「あんたたちが勇者ってやつか。子供じゃないか」
女性の後ろから大きい体の若い男が現れた。
整った顔立ちで自信満々といった感じだ…
「この先は危険だ。戦いはボク達に任せてほしい。」
「大丈夫かね。俺は嘘は嫌いだぜ」
「ボクもさ。こっちはロイド」
「やぁ。防御なら任せてくれ。」
「―ラナちゃんか。いい名前だ。
勇者というが、ずいぶん可愛いお顔だ…へへ…」
男は僕を無視し、ラナの顔から足先までを舐めるように見た
（こいつ…しかも嫁さんの前だろうよ…）
正直苦手なタイプだな…一緒に付いてくるのか？
しかしこれも人助け、ラナの紋章のためだし仕方ないか

「か、顔なんて…強さには関係ないだろう。
ボクはあなたたちの子を助ける。それだけだ」
褒められ慣れていないラナが戸惑う
「…まぁいいや。
遺跡への道のりは俺が知っているから案内する。
足手まといにならないように付いてきな」
なんだよこいつの態度は…助けて貰う身だろ
「ああ。少し長い旅になるけど、その間よろしく。」
いいのかラナ？こんなやつを仲間に入れて…

それにこんな軽装で戦うつもりか？
注意しといたほうがよさそうだ
「君…そんな装備で大丈夫か？
この旅を甘く見ないほうが…」
「大丈夫だ。問題ない。
こう見えて武術の心得があってね」
―格闘家タイプ…か
確かに体格はがっしりしているが
それにしてもモンスターの攻撃に
耐えられる装備とは思えない
いぶかしむ僕を見て、男は不敵な笑みを浮かべた
「俺のほうがラナちゃんを
守れるんじゃないかな。
誰かさんよりも…な」
「っ…」
思いがけない挑発を受け僕は言葉に詰まった
なんだこの無礼な男は。
こんなやつ助けなくていいんじゃないか？

「先を急ごうロイド。もうじき陽が落ち始める。宿のある街まですぐそこだよ」
「あ、ああ。そうだな」
仕方ない…子供を見捨てる訳にはいかない。我慢だ。正義のため、ラナのためだ…
「そういえばキミの名前を聞いてなかったね」
「俺かい？俺はゴドリックだ。よろしくな」
「そうか。暫くの間よろしく。ゴドリック」

そして僕たち3人の旅が始まった―
道中では
ゴドリックも戦いに参加した。
「オラァ！もう終わりか！」
（こいつ…素手で敵を
粉々に破壊していく。
どんな怪力なんだよ…）
ゴドリックの視界に入った敵は
次の瞬間には跡形もなく飛散して行くのだ
当然、誰もラナに近づけない
…つまり、僕の出番がないのだった…

「ゴドリックがこんなに強いなんて思わなかったよね、ロイド」
「あ、あぁ…確かに」
「へへ…ラナちゃんもやるじゃないの。それにしても今まで一人で敵を倒してたのか？」
「うん。そうだよ」
「そりゃスゲエや…勇者の名にふさわしい。最初は普通の女の子に見えたんだが、お見逸れしたよ」

そっちの坊やはあまり攻撃が得意じゃないと見える
お前はどういう役割なんだ？」
「ぼ、僕は防御に特化していて…」
「今までロイドがボクの背中を守っててくれたんだ
ボクたちは二人でひとつ―」
ゴドリックが割って入るように口を開く
「これからはラナちゃんに近づく化け物がいたら
俺が全て粉砕してやるよ。
俺たち二人が戦えば無敵って感じだ」
「あ、ありがとう。その気持ちは嬉しいよ」
「―いいコンビだな。俺たち」

「それにこうして近くにいると、何か特別な力を持っているように感じる」
「ああ。これを見て。」
そう言ってラナは肩の紋章をゴドリックに見せた
「ほう…これはなんだ？見てると胸がざわつくぜ」
「この紋章が完全な形になった時ボクの本来力が目覚める」
「そしたらあの魔王に太刀打ちできるかもしれないんだ。そのために今は経験を積んでる」
「経験？」
「人のために働いたり節制したり…禁欲の試練に打ち勝つことでこの紋章は力を持つんだ」
「へぇ…教えてくれてありがとうよ」

「しかし、欲に抗うといったってね。特に長旅で性欲なんてどうするんだ？適度な解消は必要だよな」
「せ…性欲…って…それは、えーと…」
こいつ…突然何を言い出すんだ。ラナが困ってるじゃないか
「なんだ。ラナちゃんはこの坊やとそういう関係かと思ってたよ」
「いや…僕達は幼馴染で…」
「そ、そんなの無いよね…ロイド」
慣れない話題にお互いどぎまぎする
ゴドリックは鼻で笑って肩をすくめた
「おいおい、男がこんな可愛い女の子と一緒にいて何も無しかよ？それでいいのか坊や。俺には考えられないねぇ」

「ラナちゃんも勿体ないぜ
そんな可愛いんだからモテモテだろ？」
「も…モテ…ないよ。
ボク、可愛いなんて言われたこと、ない。」
「え～？嘘だろ？
俺が独身なら放っておかないぜ
素材がいいから着飾ればもっと綺麗になる」
「そ、そうかな…
…って、
ボクは魔王を倒すため、強くなる事だけ考えてるんだ。
そういうのは縁がないよ」
「勇者様、だもんな。
でも、ラナちゃんの違う一面引き出したいなぁ」

そしてその夜、僕たちは宿を取った後、食事に向かった。
「…ってなわけさ」
「あははっ
本当？面白いなぁ」
今日は終始ゴドリックのペースで会話が進んだ
人見知りなラナだが、もう打ち解けたようだ
「ほら、ラナちゃんも飲めよ」
注文した酒を勧めるゴドリック
「お酒とかは飲まないんだ。堕落に繋がるからね。
ね、ロイド」
「ああ。僕もラナと一緒に…」

「本気か？やれやれ信じられないな。
酒も飲まない、セックスもしないんじゃ
人生損してるぜ」
「こ、声が大きいよゴドリック。
その、それ、人前で言う事じゃないだろ」
「ラナちゃんもお堅い事無しで人生楽しまなきゃ」
やっぱり相当な遊び人なんだろうなぁこの人は…
僕たちより少し年上のようだけど
あまりラナに変な事を教えないでほしいな…
「美味い酒を飲んで朝までセックス！
気持ちいいぜぇ～。これぞ生きてるってやつだ
俺が抱いてきた女の子は
みんなトロットロに気持ちよくしてやったっけなぁ」

「もう…そこまで！
食事終わらせて早く寝よう。明日も早いんだ」
ラナが恥ずかしそうに頬を赤らめて口を挟んだ
「ああ。ラナの言うとおりだ」
僕もすかさず同意する。
二人のペースを乱されちゃ溜まらない。
「お前ら…人生つまんなそうだなぁ
先に帰っててくれていいぜ
俺は飲んで女の子と遊んでくるよ
生まれたからには快楽を追いかけたいね」
好きにしてくれ…俺とラナは食事を済ませた後
ゴドリックを残して宿へと戻ったのだった

僕とラナは先に宿へ戻った。
夜も更けてきたがゴドリックはまだ帰らないようだ
…どうもあいつがいると調子が狂う
僕たち二人とは本質的に違うタイプだ
会話の主導権を握られて
ラナとの会話が減ってしまうのも辛い
「さっさとこの仕事を終わらせて
また二人に戻りたいなぁ…」
そんな事を呟きながらベッドに横になっていると
ドアをノックする音が聞こえた。
「…ラナかな？どうしたんだろう」

「こんばんはぁ♥
あら、カワイイおにーさん♥今夜私と…どおかなぁ？」
娼婦か…この宿はそんな事してるんだな…
「あぁ…悪いけど遠慮するよ」
「そんな事言わないでぇ♥
私、おクチには自信あるの。
大人のテクニック、味わってみ・な・い？」
そう言って女は僕を見つめながら舌なめずりした。
（ゴクっ…なんてエロそうなお姉さんなんだ…）
長い禁欲の旅で、正直溜まりに溜まっていた僕は
つい彼女の胸元を凝視してしまった

「ちょっとだけヌキヌキしてあげるよ♥
おにーさん素敵だから…
私も身体が熱くなってきちゃってるの…」
「いや…その…」
慣れないシチュエーションに戸惑い
きっぱりとドアを閉める事が出来ない俺
立ち尽くしてると、女が身を寄せてきた
「ほらぁ…♥おっぱい触ってみて…？」
首元に腕を回される。
（…ダメだ！俺にはラナという好きな子がいるんだ
こんな堕落は許されない！）
思い切って女を振りほどこう…
そう思った瞬間ー

「うっ！」
女の手がかけられた首元に何かが刺さった。
（しまった…これは…）
心臓の鼓動が早まり、次第に足先から全身の力が抜けた。
気が付くと俺は地面に突っ伏していた。
「くす…♥どうしたの？私の魅力に痺れちゃった？」
女の声が遠くで響いているように聞こえ、
考える間もなく意識が遠のいていった

そして―
「…ん…ここは…」
目を覚ますと僕は天井を見ていた
起き上がろうとしたが
身体に力が入らない。
特に腰から下は感覚すらもない。
腕を少し動かせるぐらいだ…
僕はあの女に何をされたんだ

「ロイド！目を覚ましたんだね。良かった…！」
ラナが心配そうな顔で駆け寄ってきた。
「ラナ…僕は一体…ここは…？」
「朝、キミの部屋を尋ねたらドアの前で倒れてたんだよ
すぐゴドリックと一緒に病院に運んだんだ」
「…娼婦のような女が僕の部屋を訪ねてきて、
何か刺された感じがしてから…
身体に力が入らないんだ」
「お医者によると毒が回ってるらしい。
特効薬は無くて自然治癒を待つしかないと言われたけど、
暫くの間は動けない…って…」
「そんな…旅はどうしよう…」

「とにかく坊やはここで休んでいてくれ
ラナと俺で十分戦えるから、行ってくる」
「えっ…そ、そういうわけには…」
「ゴドリックの子も時間が無いんだ
早く薬を見つけてこなきゃ」
こいつとラナが二人で？心配しかない…
僕が一緒に居てやらなきゃラナは…
「ラナ…」
「大丈夫。すぐに戻ってくるよ。
ボクたちは二人で一つだって。そう言ったろ？」
ラナのその言葉に僕は少し安心した
離れても僕たちの心は一つのはずだ
「暫くここで入院しててくれ。ラナはすぐ返すさ」

仕方ない…そうしてもらうしかないようだ
「わかった…ゴドリック、ラナを頼む…」
「ああ。ラナと俺が組めば無敵だ。安心しろ」
「じゃあ、行ってくるね。ロイド。
何か精の付くものも手に入れてくるから」
ラナとゴドリックは二人で部屋を出た
「精の付くものは俺らにも必要だぜ。ラナ」
ドアを閉める間際にゴドリックが言ったその言葉に
僕はなぜだか胸騒ぎがした
「…どうしてこんなことに…」
静かになった部屋の天井を眺めながら僕は呟いた
しかし今はラナを信じてこうしているしか無いんだ…

―動けなくなってからどれだけ経ったろう
―僕はあれ以来、こうして天井を眺めているだけだ。
窓から見える空だけが
代り映えのしない日々のせめてもの慰めだが
夜になればそれも不安の種になる
「ラナ…あいつと二人で大丈夫かな」
これは僕とラナの冒険だったのに
よりにもよって、あんな遊び人みたいな男と
二人で遠出するなんて。
「心配だ…変な事されてないよな
まあ、ラナは真面目な子だからそこは大丈夫だろう」
「ボクとキミは二人で一つ」
そう言ってくれたラナ…会いたい。声が聴きたい
何事もなく帰って来てくれ…頼む…

「うう…ラナ…！」
腕が動くようになってきた僕が夜になってするのは
決まってラナを思ってのオナニーだった
こんな事は堕落かもしれないが、
一人でいるとどうしても緩んでしまう
ラナがいない日を重ねるにつれ、
ラナへの想いは深まっていった。会いたい
ゴドリックと一緒ならそこら辺の雑魚に
やられることはないだろうが…
しかし無性に心配なのが
あいつとラナの二人きりの旅という事だ

「…でも、ラナは真面目だし紋章のことだってあるんだ
万が一もないさ…」
「そうだ、何を不安に思ってるんだ
僕が一番ラナと過ごしてきて、
ラナのことを知ってるんだ
たかだか最近知り合った奴と
何があるわけもないさ」
「ラナが帰ってきたらいずれ自分の気持ちも
伝えたいなぁ」
僕は夜の天井を眺めながら
長い独り言を呟いた

一体何日経ったんだ…
もう、2週間…いや3週間か？
身体はだいぶ動くようにはなってきた。
医者からもそろそろ退院を勧められている。
でも、肝心のラナ達がまだ帰ってこないのだ
「まさか…敵にやられて…」
いや、そんなことは考えたくない
不安を募らせながら天井を眺めていると
病室の外から足音が響いてきた

「ロイド！帰ったよ。元気だった？」
「ラナ…！無事だったんだな。良かった…！」
久し振りに見るラナは
分かれる前と変わらない様子だった
「ごめん、だいぶ遅くなっちゃって。
動けるようになったんだって？本当に良かった」
「ラナ…いつものラナだ…はは…
戻ってきてくれてありがとう…」
ボクはラナに会えた嬉しさと
安堵のあまり涙声になっていた
「ロイドってば大げさだよ」
ラナは優しく笑った
「ゴドリックとの旅は終わった。危険は無かったよ。
彼ともお別れを言って戻ってきた。
またボクたちの旅を始めよう」

「そうしよう。準備はすぐにできる。僕たちの旅はまだまだこれからだ」
「はは。いつものロイドだ。ボクも一安心だよ」
「それにしても結構長かったな。それだけラナは経験を積んでたわけだ」
「う、うん。それなりに…ね」
「僕も追いつけるように頑張らないと。ゴドリックとは上手くやれたようだね」
「そうだね…奔放な人だったけど結構…優しかったし」
僕はとにかくラナが死なずに戻ってきてくれた事に安心し一緒に旅していたゴドリックへの感謝の気持ちすら湧いていたのだった

ラナとの二人旅がまた始まった
ゴドリックがいた頃より敵の殲滅は遅いかもしれないがいつもの戦闘が戻ってきたことで僕は安心していた。
「また二人の旅、って感じだねやっぱりロイドが盾になってくれると安心だよ」
「ああ。後ろは任せてくれ！」
ラナも僕との旅に安心してくれてるんだろう。
君のことは僕が守る―
「僕たちは二人で一つだ！そうだよなラナ！」
僕は背後のラナに声をかけた

旅は順調に続いているようだった
今日もまた、善良な人を助けて徳を積む日々だ
「―ウソをついて人を連れていこうだなんて
絶対に許さない！」
「ちっ…こいつラナとか言う女だ…強いぞ」
「…逃げろ！」
チンピラ達はラナの剣幕に尻尾をまいて逃げていった
「勇者様ありがとうございます…！
危うく色街に売られる所でした…」
「無事でよかった。
ご両親に頼まれてきたんだ。
さぁ、戻って安心させてあげてよ」

そして僕たちは何日もかけて、
とうとう山麓の村にたどり着いた。
村人に招かれた祠の奥には
話の通り、長老の姉がいた
「おお…おおラナよ…そしてロイドか…
話は聞いておる。大きくなったの」
「お久しぶりです」
「村の長老様から言われて、
大預言者様に紋章のことを聞きに来ました」
「その日が来たか…
二人とも年頃じゃ。
ロイドにも聞かせた方が良いじゃろう」

「ラナよ…紋章の具合はどうじゃ」
「は…はい…まだ完全では…でも、これから頑張ります」
ラナはばつが悪そうに答えた。だいぶ人助けをして鍛錬を続けてきたがそれでも足りないらしい
「ふむ…焦らずともよい。では最後の契りについて教えよう…」
「それは…」

「運命の伴侶と
男女の契りを交わすことじゃ」
「え…それって…」
「お前たちも
わかる歳じゃろう…」
―勇者と共に歩む運命の伴侶に
処女を捧げ、種を受けよ。
その時、紋章は完成し
勇者は救世の力を手に入れる―」
「そ、それは誰なんですか
ラナの運命の伴侶って」
「それはロイド。お前じゃ」
「えっ？」
「幼い勇者と最も親しかった者…
それが運命の伴侶となる。
お前が今のラナと共にいる事も、
すべて運命に突き動かされてのこと…」

まさか…僕とラナがそんな運命を…！
願ってもない事で目の前がバラ色になるがラナの方を見ると彼女は表情が曇っていた
「あの…！初めてじゃなきゃ…ダメなんですか…!?」
（……え？）

ラナの言葉に
僕は思考が止まってしまった
「……」
「あ、あの、もしそうだとしたら、という事で…」
「…安心してよいぞ。
処女でなくともよい。」
「―そうですか」
ラナの表情が安堵に代わっていく。
「すまんのラナ。私の勝手な思い込みじゃった。
今時の娘なら色々あろう…」
「そっ…そういう事じゃ…
ただ、ちょっと聞いてみただけです」

初めてじゃないとダメですか…？
何でそんなことを聞くんだ
「過去に何があろうと詮索はせん。
だが、今だけは
行きずりの欲望に溺れてはいかんぞ」
「も…勿論です！
とにかく、紋章のために
鍛錬と、人助けを続けます」
「困難な試練であるほど善い…
励むのじゃ。」
「わかりました。ロイド、行こう。」
そう言ってラナは外へ出る。
僕もそれに続こうとすると…

「ロイドや」
「はい？」
「ラナの紋章が花開いた時
必要なのはお前じゃ…
そういう時は男から行くものじゃぞ。
女からは言い出せぬもんじゃ。」
「それは…
承知してます」
「…男として覚悟を決める時じゃな。ふぇふぇ…」
ラナの一番の理解者は僕だ。
その自負はある。
いずれラナと…男女の関係になれるのか。
それは嬉しいけど、
さっきのラナの言葉がずっと胸に引っかかっていた

まさかそんな運命があったなんて…
村を出て歩いてるが、どこか気まずい
(いずれセックスする日が来るんだろうけど
ラナの気持ちとかもあるしな…)
「そういえばさ、ラナ。
紋章の方はどうなんだ？見せてくれよ」
「べ、別に変化ないから…
えっと…その時が来たら…教えるよ」
ラナも照れてるみたいだ
正直、今ここで抱きしめたいぐらいだ
でも女の子とそういう経験のない僕に
そんな大胆な行動はできない
(少しずつ…ラナの様子も考えながら
二人の関係を温めていこう…)

「照れてるラナ…可愛かったな…」
ラナとの運命を知ってしまってからは
彼女を更に女性として意識し始め
僕の想いは加速していった。
ラナは実際、性欲とかどうしてるんだろう？
（女子だって性欲ってある…よな？多分…）
紋章のこともあるし、
色々と耐えてるのかもしれない
（―だからこそ、初めての夜は優しくしてあげたいな…）
ただ、問題は僕自身が女性の扱いに慣れてない事だ
うーん、どうすればいいんだ？
取りとめもなくそんなことを考えながら夜は更けていった

次の日の朝―
「え？この街に暫く留まるって？」
「うん。その…最初の目的だった山麓の村は行ったし」
「暫くここで困った人を探したりすればいいわけか。確かにそのほうが効率はよさそうだ」
「うん。だから、手分けして情報を集めたりしたらいいんじゃないかな？」
いつも脳筋なラナにしてはなかなか冷静な判断だ
僕はそれに乗ることにした。

そして…
僕とラナは手分けして
何か人の役に立てそうな情報を探していた
いざ探そうってなると簡単に見つかるもんでもないな…
結構歩き回ったけど、この街は割と平和なようだ
ラナの方は何か見つかったのかな…
多分その辺を探してると思うけど…
「お～いラナー
いるか～？いたら返事してくれー」

日が暮れて―
宿に戻ろうとすると
向こうからラナが歩いてきた
「あっ…ロイド…」
「ラナ…？何でゴドリックが…？」
「うん、たまたま会っちゃって…」
「…この辺に来てたもんでね」
たまたま？ゴドリックと出会った場所からは
だいぶ離れてるが…何しに来たんだろう
「そ、それでロイド！
何かやるべき事は見つかった？」

「あ…ああ。やっと一つ見つかってね。
明日の夜、ここから離れた村に向かう人が
警護してほしいと言ってるんだ。どうする？」
「警護…か…」
「明日の夜は無理なんじゃないか？
ラナは用事があるんだ」
「…！」
「な、ラナ。さっき言ってただろ」
「う…うん…ごめんロイド。夜はちょっと…」
「な。なんだよ用事って？」

「あまり女の子を詮索するなよ
ラナは忙しいんだ。な！」
「で、出来れば昼間がいいかな…
明日の夜は休んでて。ロイド…っ」
「で、でも夜に頼まれたんだ。
困ってる人を見たら助けなきゃ…ラナ」
どういう事なんだ…？
何で僕に隠し事するんだよラナ…
しかも何でゴドリックが一緒なんだ？
「息が荒いぞ？具合が悪いのかい？」
「え…そうかな。
大丈夫だよ…あはは」
どうもラナの様子がおかしい…

203
コンコン
どうもラナの様子が変だ。
僕は心配になって夜、ラナの部屋の前まで来た。
部屋にいるのか、出かけてるのか…
ちゃんとノックはしないとな。
前みたいに着替え中だとまずい…
「ラナ、いるかい？」

扉の向こう、少し遠くにラナの声が聞こえた。

「うんっ…！待って。開けないで。今…着替えてるから…」

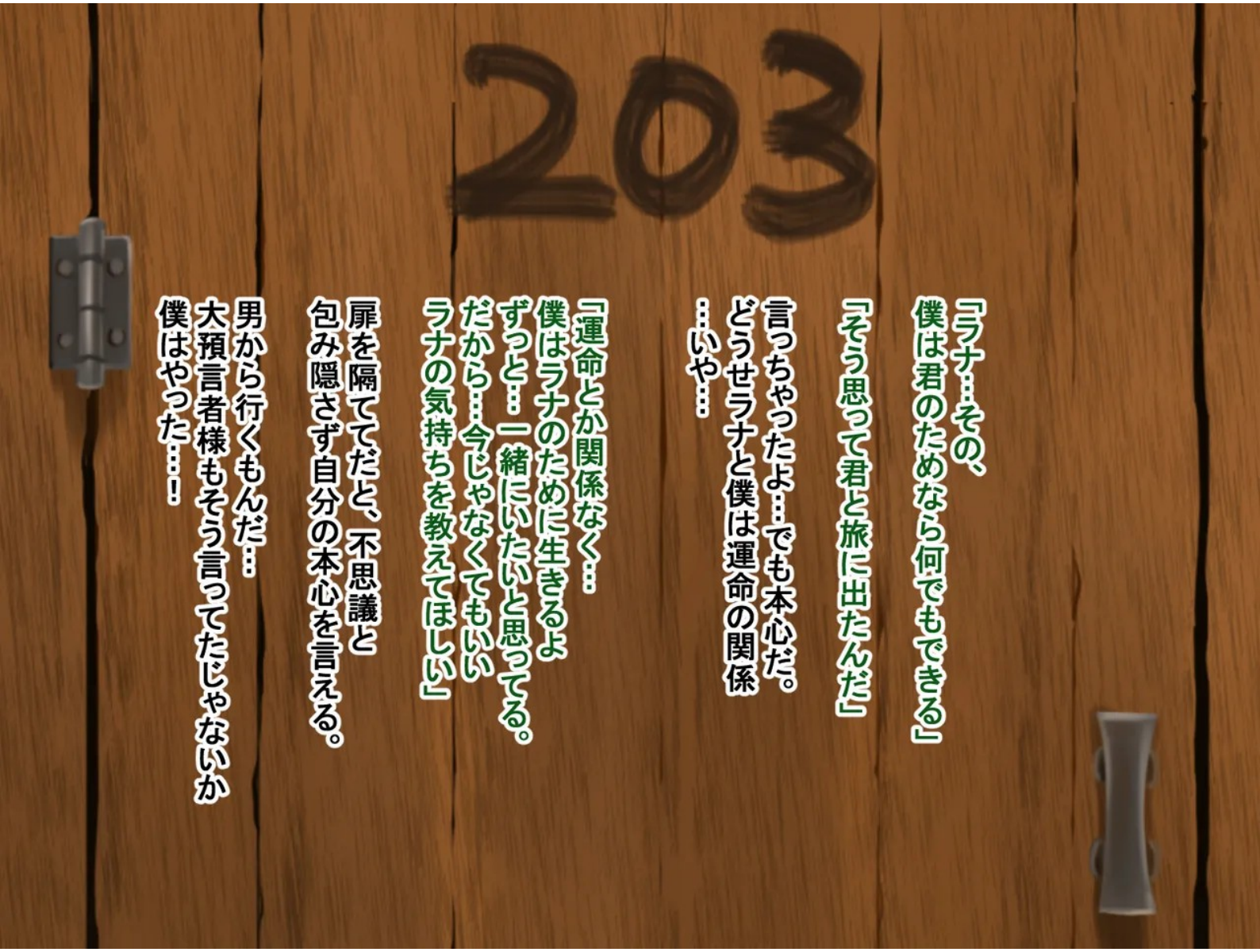
（着替え中か…）

「ああ…ただ、ちょっと言っておきたくて」

「何？ロイド…」

「さっきも体調悪そうだったから。何か僕にできることがあれば何でも言ってくれ」

「…うん、ありがとう…っ　ぅッ…」



「ラナ…その、
僕は君のためなら何でもできる」

「そう思って君と旅に出たんだ」

言っちゃったよ…でも本心だ。
どうせラナと僕は運命の関係
…いや…

「運命とか関係なく…
僕はラナのために生きるよ
ずっと…一緒にいたいと思ってる。
だから…今じゃなくてもいい
ラナの気持ちを教えてほしい」

扉を隔ててだと、不思議と
包み隠さず自分の本心を言える。

男から行くもんだ…
大預言者様もそう言ってたじゃないか
僕はやった…！

「ろ、ロイド、
ボク、いま手が離せないからっ…
うぁっ♥

あ、後でっ…！」

渾身の告白だったのに
そっけない答えが帰って来た…

（これ、もしかして振られたのか…？
急に言われて驚いただけか…
そうであってほしい）

「わ…わかった。
…おやすみ、ラナ。」

「ありがとうっ！おやすみっ！」

僕はどこか気まずくなって
早めに自分の部屋に戻った

次の日…朝からラナがいない…
僕はラナを一日中探し回って、やっと見つけた
「ラナ！どこに行ってたんだ？
…そ、その格好は…？」
ラナはまるで娼婦のような格好で
ゴドリックと歩いていた
「ロイド…どうしたの？」
「どうしたのって…それはこっちが聞きたいよ
…その格好はどうしたんだよ？
剣は？それじゃ戦えないじゃないか」
「…もっと可愛くらなきゃって思って…
ロイド、ボク、女の子に見える？」
ラナの目つきはどこか虚ろで
明らかにいつもの雰囲気とは違っていたではなかった
「今日のラナはおめかしの日さ
似合ってるだろ？一日かけて選んだんだ」

「おめかしって…僕たちは今、紋章のために人助けを頑張らなきゃ…」
ラナの紋章が見たことも無いような禍々しい形に変わっている事に気づく
「ラナ、その紋章、どうしたんだ？」
「ゴドリック様とお揃いなんだ。素敵でしょ？」
「な、何を言ってるんだラナ…そいつから離れろ！何か企んでるぞ！」
僕は気が動転してラナに怒鳴った
「怒らないで。ボク頑張るから…魔王を倒すんだ…」
「行こうぜラナ。こんなつまらん男、放っておけ」

ゴドリックとラナは僕を一瞥もせずその場を立ち去った
(どうしちゃったんだラナ…
あんな格好で街を歩いて平気な子じゃないはずだ
それに、あの肩の紋章は一体…ゴドリックと何があったんだ…)
あまりの衝撃に暫く固まってしまった僕。
「―ま…待てよ!」
気を取り直して二人を追いかけたが、
既に見失ってしまった。
この日から、
ラナは宿にも帰ってこず、失踪してしまう――

あれから何日経っただろうか。
街の人に聞いて回っても、当然誰も知らず…
ラナの顔を見られることはもう無かった。
「ラナ…どこに行っちゃったんだよ……」
宿の滞在費も、じきに底をつく。
ラナは、僕たちは、この世界はどうなってしまうのか…
どうしていいかわからず頭を抱えていると
娼婦のような女が部屋を訪ねてきた

「こんばんはぁ♥」
目の前に立っていたのは娼婦だ
もうこりごりだ
「――娼婦は必要ない…帰ってくれ」
「娼婦なんて失礼しちゃう。
私は魔法使いのフィリアって言います。
ロイドくん、ラナちゃんをお探しなんでしょ？」
「――な、何で僕たちの名前を？」
「私のこの千里眼は何でもお見通し♥
今、ラナちゃんが何してるか見てみたくない？」
なんか…人間の雰囲気じゃない。何者なんだ…
「そ、そりゃあ…ずっと探してるんだ
少し前から失踪してる」

「じゃ、見せてあげる」

女が掲げた水晶に映ったのはあの格好をしたラナのあられもない姿だった

「……ラナ……ウソだろ……？」

「あらあら、またこんな事してる。」

「ど、どうして…ゴドリックの奴に犯されてるんだな！」

「ブーッ、はずれです。
ラナちゃんはずっと前からゴドリックにメロメロだったんだから。
――見せてあげますね」

「嬉しいよラナ
我慢してたんだよな」
「…ボク…初めてだから…
その…優しくしてほしい…」
「俺に任せろ
二人で気持ちよくなろうな」
ゴドリックの声だ…これは…
ラナが依然、大預言者様に言ったことを思い出す。
(もしかして、僕の知らないところで
ゴドリックに処女を捧げていたのか…?そんな…)

「ゴドリックのおチンポ…
いっぱい射精したのに、まだバキバキ…
素敵だよぉ…♥」

ウソだ…ラナがこんな事言うわけが…
でも、肩の紋章は確実に彼女のものだった…
それにこれ…中に出されてるじゃないか…!!
二人の関係がそこまで進んでただって？信じたくない

「んっちゅ…っ♥んっ♥夜まで待ってってば…♥」

「ラナからパンツ脱いだんだぜ？」

「だってキミがチューするからぁ…♥」

「も、もういい……もう沢山だ！
こんなもの、嘘に決まってる
あのラナがこんな事するわけがない」
「…ラナちゃんも処女だったけど
あなたもいかにも童貞ですねぇ…
ラナちゃんは一足先に、大人の階段上りましたよ？」
「ウソだ…ラナは僕の運命の人だぞ
そんな水晶玉で何がわかる！」
「運命なんて、おチンポ一つで
変えられちゃうの…
女の子はおチンポの気持ちよさに勝てないんだから
…経験者が語ってるんですよ？」
「ふ、ふ、ふざけたことを…！」
「貴方は現実と向き合うべきですね。
今、二人の目の前に魔法で飛ばしてあげます。」

フィリアの魔法にかけられた僕は
よどんだ空気の気持ちの悪い空間に飛ばされた
「ここは一体…動けない…」
「あんッ♥あぁあン♥きもちいいのぉ♥」
「―ラナ…!?ウソだろ…?」
あんっ
びくっ
ぐッ
あッ
あ
あ
びくん
あっ
ぐっちゅ
ぐっちゅ
ぐっちゅ
ばちっ
あっ
はっ
はっ
びくっ
離れたベッドで
全く別人のようにされてしまったラナが
ゴドリックと絡んでいる
それは悪夢のような光景だった
「人間の貴方を魔界に特別ご招待～♪
ここは私たちが暮らす素敵な楽園…
ラナちゃんも、ここの
住人になることを選んだの」

「お前は…！くそ…そういう事だったのか…！」
やほー、ロイド君♥びっくりした？私の毒、結構効いたでしょ」
「最初から僕たちを…それもこんなやり方で…！」
「敵は経験浅いうちに楽しく潰す…それが私達魔族のやり方♥
私ルカ。私もフィリアも、ラナちゃんと同じ元々は人間だったんだよ？」
「お前たちも…ラナみたいに堕とされたってのか」
あんっ
びくっ
ぐっ
あっ
あ
あ
びくん
あっ
ぐっちゅ
ぐっちゅ
ぐっちゅ
ばちっ
あっ
はっ
はっ
びくっ

「あはぁあっ♥ゴドリック様のおチンポ素敵ィ♥」
「ラナ、お前は俺の剣になれ魔族に楯突くものを切り捨てろ」
「はいッ♥ボクはゴドリック様のために働きますぅ♥だからもっとしてえぇえン♥♥」
「いい子だ。今日もたっぷり中出ししてやる…」
「あっ♥あ♥幸せっ♥ボク幸せぇっ♥」
魔界にラナの喘ぎ声だけが響く。
ラナはあんな体をして、セックスの時はあんなに甘えた声をあげるのか…
ずっと好きだった子のあられもない姿をこんな形で見ることになるなんて…
あんっ
あッ
あ
あっ
ぐっちゅ
ぐっちゅ
ぐっちゅ
ばちっ
びくっ
びくん
はっ

「好きだった子のセックス見られて良かったね〜。勃起しちゃって。」

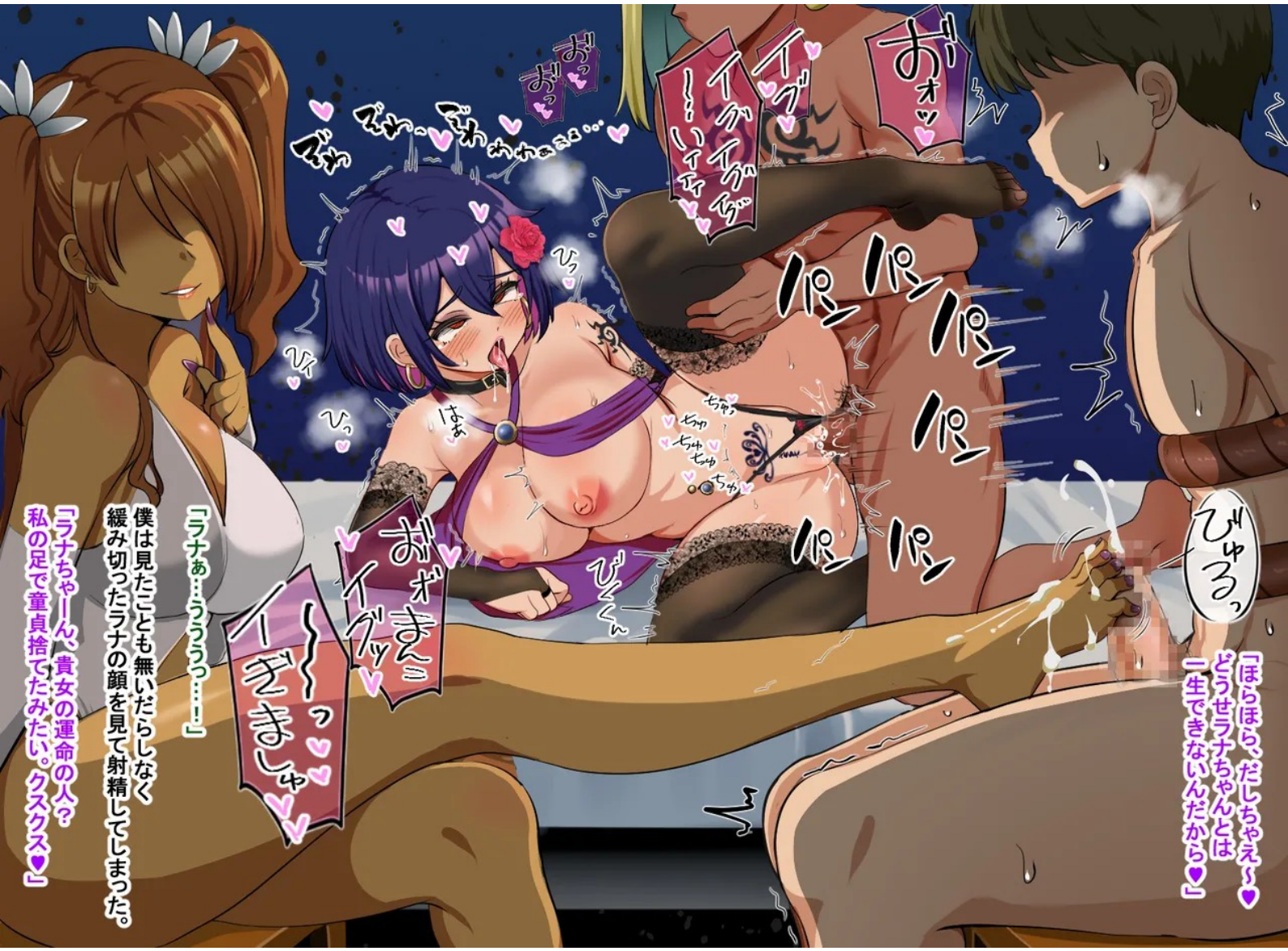
哀しい事に僕は初めて見るラナの本当の姿を見て強烈に勃起していた

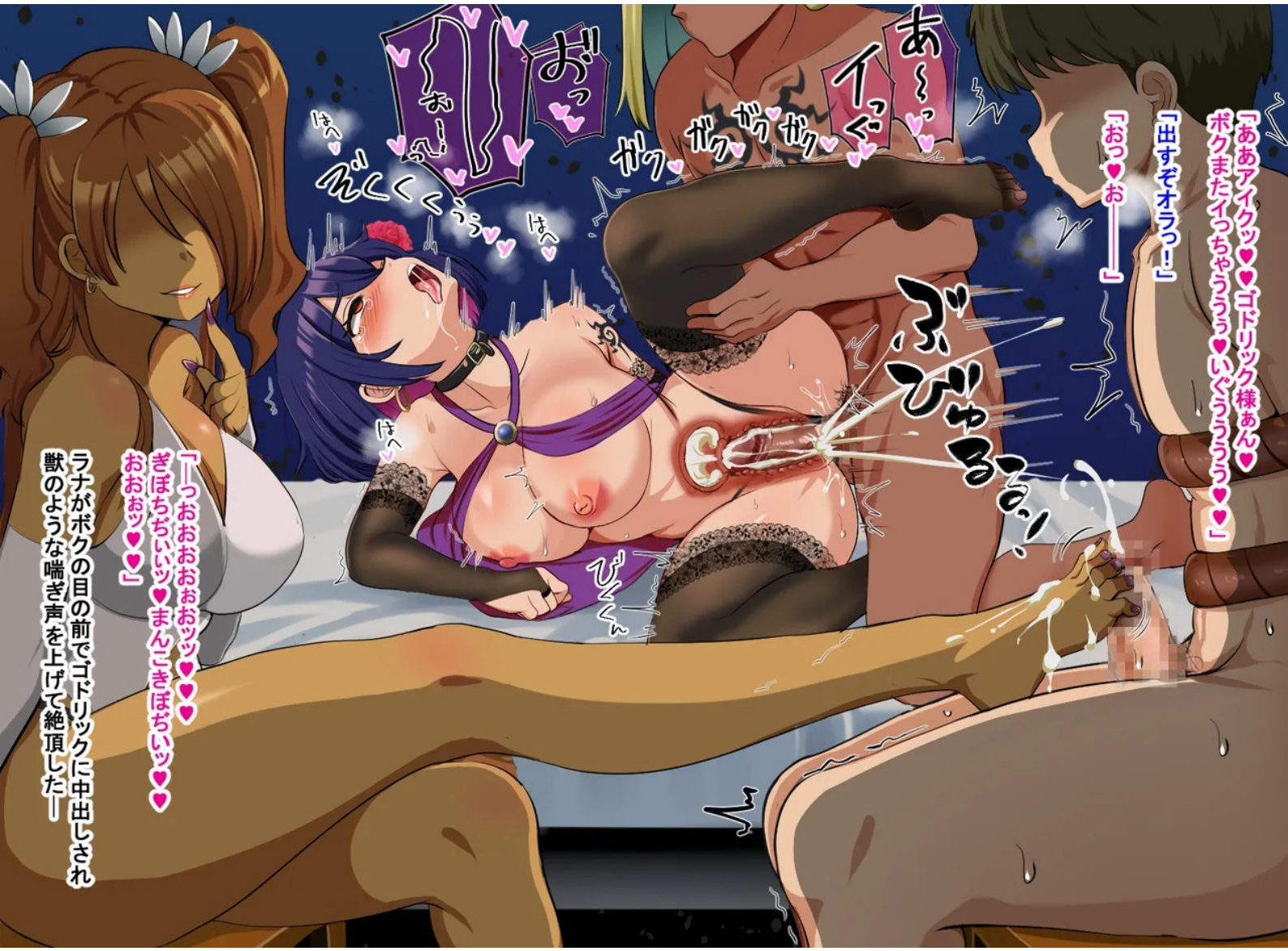
ルカはそれに足を伸ばしてきたのだ

「あ、あひっ…」

「情けない声出しちゃって…クス♥」

「ほら、坊やに見せてやれ」
「ああ…ろ…ロイド…
んやぁぁぁあっ♥ああああっ♥
ボク…あぁあンっ♥」
「はぁはぁ…ラナ…ラナっ…」
ぐっちゅ
ぐっちゅ
ぐっちゅ
ぐっちゅ
ビクンビクン！
くにくに
ラナと僕の目が合った
僕の運命の人だったのに…
ずっと好きだったのに…どうしてこんな事に
「うあぁあっ♥きもちいいっ♥
ゴドリック様ぁ♥ひうううう♥♥♥」
一瞬正気に戻ったラナだったが
また再びゴドリックが与える快楽の波に
溺れていった


「ほらほら、だしちゃえ～♥
どうせラナちゃんとは
一生できないんだから♥」
びゅるっ
おォッ
イグ
イグイグイグ
～～いィィ
パン
パン
パン
パン
パン
おおっ
ごめ
ごめんなさい…
ぴっ
ぴくん
はぁ
おおまんこ
イグッ
～～っ
イきましゃ
「ラナぁ…ううっ…！」
僕は見たことも無いだらしなく
緩み切ったラナの顔を見て射精してしまった。
「ラナちゃーん、貴女の運命の人？
私の足で童貞捨てたみたい。クスクス♥」


「ああアイクッ♥♥ゴドリック様ぁん♥
ボクまたイっちゃうぅぅ♥いぐうううう♥♥」
「出すぞオラっ！」
「おっ♥お――」
あ～っ
イっぐ
ガク ガク ガク
ガク
おっ
おっ
ぐぐぐぐぐ
はへ♥
はへ♥
はへ♥
ぶびゅるるっ！
びくん
「―っおおおおおッ♥♥♥
ぎぼぢぢいいッ♥まんこぎぼぢいッ♥♥
おおぉッ♥♥」
ラナがボクの目の前でゴドリックに中出しされ
獣のような喘ぎ声を上げて絶頂した―

「運命の伴侶とやらに
今のお前の姿を見せてやれ。ラナ」
「ううううっ♥ロイ…ど…っ」
「ラナ…ラナ…」
目の前でラナが犯されているのに
僕はそれを見ているしかない
パン
パン
パン
パン
あっ
あ
あっ
あ
ぐっうっっ
はぁ
はぁ
はぁ
はっ
ブブっ
ビン
ビン
たとえ身体が自由になっても
ラナがこうなってしまっては
僕たちに勝ち目はない…
悔しいのに
夢にまで見たラナの綺麗な身体に
チンポは情けなく勃起して止まらなかった

「ごめんなさいロイド…
ボク、ずっとゴドリックと
身体の関係だったの…」
「ど、どうして…
いつからそんな…まさか…」
「処女もゴドリックにあげたの…
キミの所に戻って来た頃には
何回もセックスしちゃってたのっ…」
フィリアが映し出したあの映像が
本当だったというのか…
「でもキミには
恐くて言えなかった…」
「ラナ…」
でも、ラナが今、正気を取り戻しているように見える。
まだ心が揺らいでいる今なら僕の言葉が通じるかもしれない
「…い、今からだって…やり直せるはずだ…」
ビン
ビン

「やり直せると思うか？ラナ」
ゴドリックがラナに腰を打ち付ける
「んおおおおっ♥もうダメなの♥ボクもう無理なの♥ひっ♥ひいっ♥」
パン
パン
パン
パン
「この人のおチンポがないと生きていけない身体になっちゃったのっ♥♥」
「ラナ……！」
あ～っ
あぁんっ
ちゅ
ちゅっ
ちゅっ
おっ
おっ
びくんっ
びくんっ
ふっ
ふっ
ふっ
んおおおっ
ビン
ビン

「僕たちが…紋章によって結ばれるべきだったんだ…！」
パンッ
パンッ
パンッ
パンッ
あぉあぁ
ぶるるる
ぶるっ
ふっ
ふっ
「そんな紋章はとっくに上書きしちまったなぁラナ」
「あぁぁあ♥♥深い深い♥いぐいぐいぐ♥♥いッッッ――♥♥♥♥」
絶頂に震えた彼女の肩には禍々しい紋様が刻まれている
「ラナ…目を覚ましてくれ…！」
「諦めな。ここまで来たら自我の崩壊は止まらないそのうち人間だった事も忘れるのさ」
ビン

「あがぁあぁッ♥♥ずっといってる♥♥♥あぁ
ぎぼぢいいよぉお♥♥♥♥ちんぽしゅき♥♥ちんぽしゅきぃ♥♥」
ラナが絶頂し口を大きく開けると鋭いものが見える
「き、牙が…？」
「俺の子を孕んだラナの悪魔化は今も進んでるお前らの物語はとっくに終わりだ」
パンッ
パンッ
パンッ
パンッ
か…
は…
ぎぼぢいい
ちんぽしゅき
ちんぽしゅき
ぶるるる
はっ
はぁ
ぶるっ
はっ
はぁ
ビン
ビン

「お前の伴侶は誰だラナ」
「ゴドリック様♥ゴドリック様ぁ♥♥
ボクはあなたのおチンポに服従してますぅ♥♥」
「はぁ……！はぁ……！
そんな…ラナ…」
パンッ
パンッ
パンッ
パンッ
ぐるるる
ぐるっ
ぐぐぐ
はっ
はぁ
はぁ
ちゅっ
ちゅっ
ちゅっ
ぎぼちぃっ
ちんぽしゅき
ちんぽしゅき
はっ
はっ
ビン
ビン

「出すぞオラッ！」
「おっほおおおおおンッ♥♥
一気に濃いの来てるぅう♥♥
しあわしぇなのおおおっ♥♥♥♥♥♥」
ドビュルルルッ
おっほおおおお
ビクビクビクッ!!
ぶるるる、
ぶるっ♥
ほっ♥
ほっ♥
ほっ♥
ほっ♥
ビン
ビン
初めて間近で見るラナのイキ顔は
欲望にまみれ、
涙を流して無様に快楽を貪る
淫乱なメスそのものだった。
そこに勇者の面影は微塵もなかった…

僕は数日にわたってラナとゴドリックが快楽を貪り合うのを見せつけられていた―
「しゆき♥ゴドリック様しゆきぃ♥」
「いいのか？ラナ。ロイドが見てるぞ？」
「ロイド…？んあっっ♥ロイドっ♥ボクが受精するとこ見てて♥」
「ラナ、お前は勇者か？魔族か？」
「ボクは魔族です…♥この世界は魔族のものですっ♥♥♥」
少し前のラナなら信じられない言葉だ
人間としての自我は着実に崩壊しているようだった…
ぐっちゅ
ぐっちゅ
ぐっちゅ
ちゅ
ちゅ
ちゅぷ…
ん
んー
んむっ
びくっ
きゅ…

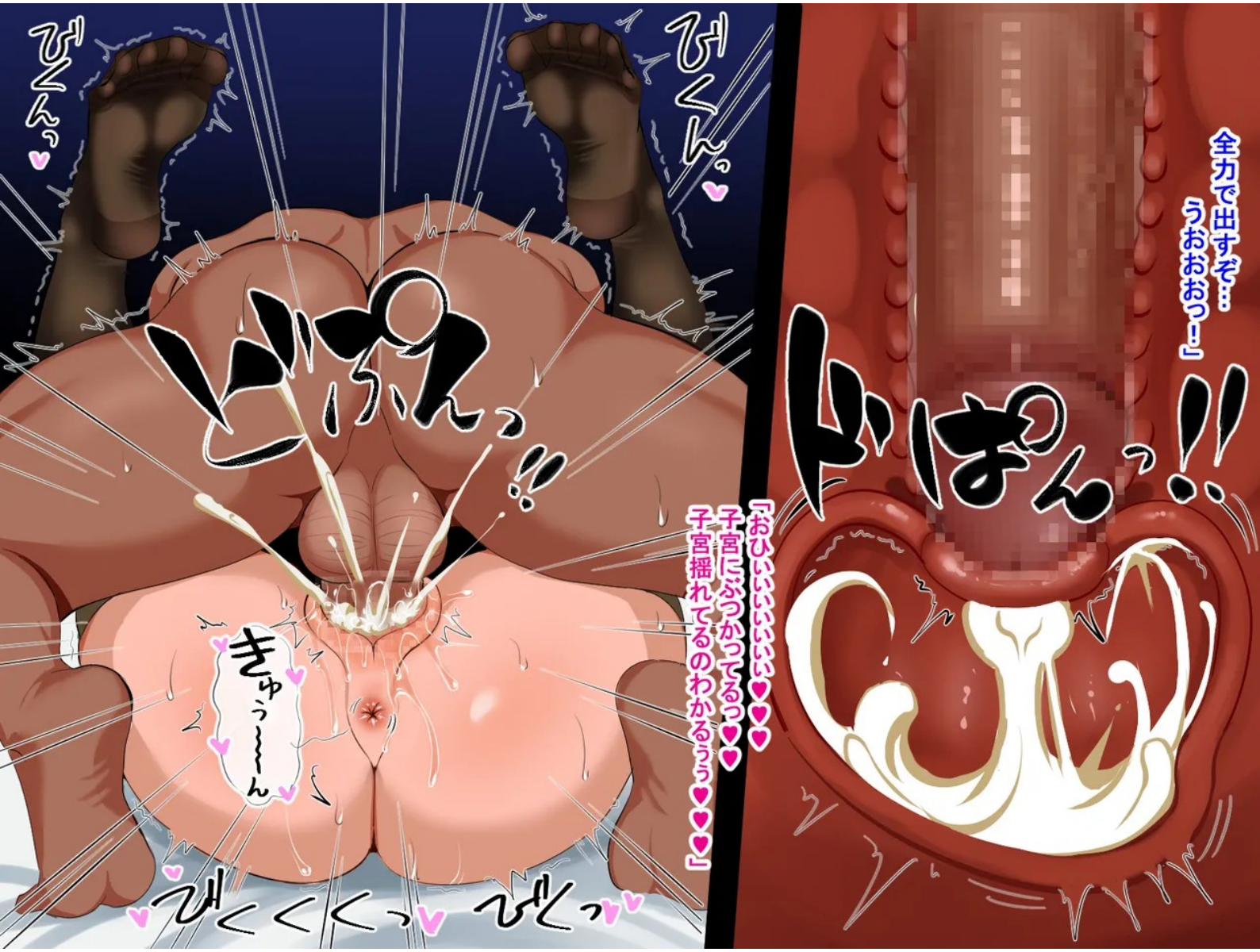
その瞬間、こちら側を向いたラナと目が合った。
彼女のその目は既に人間のそれでは無くなっていた

「ラナ…」

「ふあぁぁッ♥きもちいっ♥おまんこきもちいっ♥」

ラナは僕の呼びかけに応えることも無くなっていた

やがてゴドリックのチンポは
ラナの奥深くまで挿し込まれた
ぶぷぷぷ…
むっ…ちゅうううう…♥
「おおぉおおおおおっ♥♥♥
子宮潰されるううううう♥♥♥♥
刺激つよしゅぎるのおおおお♥♥」
ぶぷぷぷぷ…
びくびくっ♥
ぐちゅっ…
コプッ…
ひくっ…
ひくっ…
びくくくっ♥
びくっ♥


全力で出すぞ…
うおおおっ！」
ドぽんっ!!
「おひいいいいいい♥♥♥
子宮にぶつかってるっ♥♥
子宮揺れてるのわかるぅぅ♥♥♥」
びくんっ♥
びくんっ♥
ビぶんっ!!
きゅぅ～～ん
びくくくっ♥
びくっ♥

「ひっ♥ひいうっ♥
イッたから♥もうイったからぁ♥
まだ敏感だからぁ♥
少し休ませてぇ♥♥」
「収まらねえんだよ
金玉カラになるまで
逃がさないぞぉ？」
「はぁぁあん♥
逞しくて素敵っ♥
あん♥あぁんッ♥」
中に出された精液が
抜かずのピストンで漏れ出てくる
ぐっちゅ
ぐっちゅ
ぐっちゅ
あぁん
ぎぼぢッ
はぁぁン
ゴプッ…ッ
ラナは涙と鼻水とヨダレで
ぐしょぐしょになって
完全にゴドリックに
支配されたメスだった・・
ぞくぞくっ
ひっ
ひっ
ひぃん

どうしてこんな事になってしまったんだろう
僕がもっとしっかりしてればラナは…
僕は彼女が人間だったころを思い出した
男勝りの強さで正義の味方だったラナは
もうここにはいない。
ただ紋章の力だけを信じて
魔族に立ち向かおうとしていた
僕たちはあまりにも純朴すぎたんだ
ぐっちゅ
ぐっちゅ
ぐっちゅ
ちん
ぎぼぢッ
はぁぁん
ゴププッ
ひぃ
ひっ
ひっ
ひぃん

「はぁはぁ…行くぞラナ」
ゴドリックの腰の動きが一掃早まる
ひぃん
あっ
あ～っ
「ひいいいんッ♥♥♥
きもちいっ♥
大好きな人と中出しエッチ～
しあわせしゅぎるぅ♥♥♥」
ひぃ
ひ～っ
ひっ
とろ～ん
しゅき
しゅきぃ
「子宮タプタプにしてほしいか～？」
「ちゅーして♥
ごどりっくさま♥
ちゅーしながら
中出しがいいのぉ♥
ボクのこと愛してぇ♥♥」
ぐっちゅぐっちゅ
ぐっちゅ
ぐっちゅ
パン
パン
パン
パン
パン
びくっ
あぁん
きもちぃ
はぁぁん

「かわいいなラナは…」
「ん～～～～～ッ♥♥♥♥」
ぢゅっ ぢゅっ
ぢゅるるるっ
びくっ
びくびくっ
ゴプッ!!
ぎゅうぅ～
ラナはゴドリックとのセックスに
興奮して、あいつの唇を
貪るように吸った
そして始まる大量の中出し…
それはまさしく、心を許し合った
恋人同士のセックスだった
…僕がしたかった事だった…

「―どうですか？
ラナちゃんはもうゴドリックのもの…
この魔界で暮らすことを決めたの。
既に彼の種を孕んで、魔族化は止まらない―
さよならできる？」
フィリアの言葉は冷酷だった
でも―
「…まだラナは少しだけ、
僕のことを憶えてくれてる…
それまでは…
彼女のそばにいさせてくれ…」
僕は涙声で答えた。
せめて、彼女に人間性が残ってる間まで
僕はラナと一緒にいるんだ―
そのあとは、もうどうなったっていい
「未練がましいですね…」

「それも面白そうじゃない？」
フィリアの背後からやってきたのは
ルカだった
「魔族の子種を孕んだら、あっという間だけど…
せめて人間のラナちゃんが残ってるまでは
一緒にいてあげたいんだよね？
ロイド君…その優しさ、私グッときちゃう♥」
「ルカは相変わらず悪趣味ですねぇ…
でも、彼もお望みだし、このままにしておいてあげます」
「ラナちゃんの最期まで、ね♥」

ラナの最後を見届ける
そう決めて僕はここに磔になっている
それからラナの悪魔化は急速に進み
もはや彼女はかつての面影だけを残し
人間性は失ったようだった
「ゴドリック様ぁ♥
んっ♥んっ♥きもちいい♥」
「いいぞ…その調子で腰を振れ」
「はい♥ゴドリック様もラナのおまんこで
気持ちよくなってぇ♥あっ♥あぁっ♥」
びくっ♥
んっ♥
びくんっ♥
あっ♥
あっ♥きもち…♥
あぁんっ♥
ぷるんっ♥ぷるんっ♥
あ♥
ぐちゅ♥ぐちゅ♥
にゅるっ♥

「あぁっ♥すきぃ♥私のこときもちくしてくれるおちんちん♥」
「くく…すっかりこいつの虜だなロイド君がオッ勃ててお前を見てるぜやってほしいんじゃないか？」
「ロイドって誰ぇ…？ボクそんな人知らないよ」
ラナ…もう、僕のことも憶えてないのか
「ボクが知ってる男の人はぁ♥ゴドリック様だけだよ♥」
「お前と一緒に世界を救うんじゃ無かったのか？ん？」
「うん…ボク、世界を救うの…勇者だもん…」
そう言いながら、ラナは腰を振った
自分のことはまだかろうじて憶えているようだった
でもそれはラナの残骸でしかなかった…
びくっ♥
んっ♥
びくんっ♥
あっ♥
あっ♥きもちっ…♥
ぷるんっ♥
あぁんっ♥
しゅき♥
あ♥
ぐちゅ
ぐちゅ
にゅちゅ

「ラナ、お前が子供を産んだら
一度人間界に降りて略奪しに行こうな」
「私、ゴドリック様のためなら
何でもします♥」
よしよし、いい子だ
お前は俺の女だ
「うん♥私のこと
女の子あっかいしてくれたの
ゴドリック様だけ♥
うれしかったの♥」
ラナの中にかろうじて残っている
人間のころの記憶だろうか…
びくっ♥
んっ♥
びくんっ♥
あっ♥
あっ♥
きもち…♥
あぁんっ♥
ぷるんっ♥
ぷるんっ♥
あ♥
ぐちっ♥
ぐぢっ♥
ぐちっ♥
にゅちゅ

そうか…僕も男勝りな彼女をつい雑に扱ってしまった事もあった
（僕がいつもラナのそばにいたのに本当は彼女のことを何もわかってなかったのかもしれない…）
今更後悔しても全てが遅い…
「もっと腰落とせ…」
ぐぐぐぐぐ♥
お…っ…
ぬぢゅ
ぬぢゅっ
ぷるんぷるん♥
ほ♥
ほぉ♥
おぉ♥
「んっおぉおおっ♥奥に当たりますぅっ♥」
「ヨダレ垂らすほど気持ちいいかぁ？」
「ほっ…♥ほっ…♥んおぉおっ…♥きもちいいのっ…♥♥♥」

「出すぞ…くっ…ー」
「あああああっ♥
ぷりっぷりのせーしきたぁぁぁ♥♥」
「っ～～～♥♥♥♥♥」
ラナが声にならない声を上げて
長く深く絶頂した
「かわいいぞぉラナ」
ぬぢゅ
ぬぢゅっ
とびゅ!!
ぷるん♥ぷるん♥
ほ♥
ほ♥
びくびく♥

「ほっ♥ほっ♥ほっ♥
ちんぽっ♥もっとちんぽっ♥」
絶頂の後、ラナは更に
本能に任せ腰を振り出した
堕落に罪悪感を持っていた
彼女の姿は
とっくに消え失せていた
ぐっちゃ
ぐっちゃ
ぐっちゃ

「この俺から搾り取るとはな…うおおおッ…」
「ひっ♥ひいいいい～～♥ほひっ♥ほひっ♥溜まってきてるっ♥ゴドリック様の精子で私の子宮ミッチミチに満たしてぇ♥」
「これたまんないのぉ♥子宮ムズムズきもちよしゅぎるのぉ♥♥」
魔族化した彼女は無尽蔵の体力と肉欲で一日中快楽を貪っている。
今日も魔界にはラナの淫靡な喘ぎ声が響き続けていた…
じん
ぎぼぢッ
ぷるん
ごポォ…
ひぃん
はぁ

ラナのお腹が膨れ始めたのはそれからすぐだった
「あああああっ♥お尻気持ちいいいッ♥♥♥」
「魔族の女は穴という穴でイケるもんさ。今幸せか？ラナ」
「はいい♥私幸せです♥毎日セックスしてキモチいいの♥」
びくっ
はっ
おッ
あっ
あっ
びく
むにゅ
はっ
きもちっ
あぁんっ
ぐっちゅ
ぐちゅ

「少し前まで俺達の敵だったラナが
今は俺の子を孕んでるんだから
女は変わるもんだな」
「私は魔族の女です♥
ゴドリック様を狙うなんて
滅相もありませんッ」
「人間を殺せるか」
「はい♥魔族に楯突く人間は
私たちの敵です♥」
もう自分が勇者だった事も忘れ
完全に魔族に墜ちてしまったようだ
あッ
あぁん
はっ
びくっ
あ～っ
はっ
はぁぁン
チンポ
チンポしゅき
ぐっちゅ
ぐちゅ

「いい子だ…ケツの中に出してやるぞ」
「おひイィィ♥♥お尻のアナ溶けちゃうッ♥これっ♥きもちよしゅぎりゆ♥♥」
おひィィ
ぎぼぢッ
ぐるるっ
うずうずうずうず…
ぴぃ…
ぐぼっぐぼっ
ぴゅっ
「さすがに鍛えてるだけあってケツ穴の締まりが違うな最高だ…」
「うあぁぁぁ♥ひっ♥ひいい♥ゴドリックしゃまぁっ♥私…♥私おっぱいが変ッ…♥」
ぐぼっ
ぐぼっ
ぐぼっ
ぐぅぅっ
ぐぅぅっ
ぐぅぅっ
ぴぃっ
ぴぃん

「おほおおぉおおっ♥♥
おっぱいイくぅうううっ♥♥」
「くくく…今のお前の姿を
昔の相棒はどんな気持ちで
見てるんだろうな」
「私に相棒なんていませんっ♥♥あぁぁん♥
生まれた時からゴドリック様のものでしゅうう♥♥♥」
ぷちゅ♥
ぷちゅっ♥
ぶるるっ♥
ぐぼっ
ぐぼっ
ぐぼっ
ぐぼっ
ぷぴゅっ
ぷぴゅるっ♥
どぷぷぷっ
おっ
ほぉ

「んうううん♥だめぇぇ♥♥おちっこでゆっ♥♥♥」
「気持ちよすぎて緩んだかぁ？可愛い奴め」
ぷちゅ♥
ぷちゅっ♥
ぐるっ♥
ぐにっ
ぐにっ
「おひいいいいいい♥♥♥尿道きもぢいいいい♥♥♥おしっこしながらいってるうううう♥♥♥」
おひぃぃぃ
どんなに見た目が変わっても、人格を失っても声だけはラナのまま、彼女は乱れ狂って喘ぎ続けた
ぞわわわ
ぞわわわ
しょおおおお…
ぞくぞくぞく

（終わりだ…）
―もうここに僕の知っているラナはいない。
彼女の最後は見届けた…
僕は君がずっと好きだったのに
守る事さえ出来なかった…
（謝ったって取り返しがつかないのは解ってる
でも、僕には謝るしかできないんだ。
ごめん、ラナ…）

「もう満足しましたかぁ？」
「ああ…もういい。あとはどうにでもしてくれ」
「ラナちゃん、この人間どうしよっか？」
「この人誰？何でここに人間がいるのかな？悪い奴は私が切り捨てるよ」
（ラナ…そんな…）
いや、どうせならラナに殺されて終わったほうがいいのかもしれない

「うーん、単純に殺すのもつまんなくない？
ネズミにでもして帰してあげるのどう？」
「あは♪それ面白いかもです」
「魔界のことを喋られるのも困るしね」
「というわけで～、あなたは人間界で
ネズミとして一生を過ごしてね。
安心して。人間の頃の記憶は残しといてあげる」
「そんな…いっそ殺してくれ！」
「猫ちゃんに気を付けてね～」

僕はフィリアの魔法でネズミにされ、
人間世界に帰された。
野生動物としてひたすらに生存本能に振り回される毎日で
それをどうすることもできない。
最悪なのは人間の記憶が残っている事だ。
今もラナのことを忘れた日は一日たりとも無い。
勇者ラナがいなくなった街は
再び魔物達によって気まぐれに襲われた
そんな日はそこら中に食料が散乱し、
僕にとってもご馳走にあずかれる日でもある

「抵抗する人間は私が排除したよ」
(ラナ…!)
声の主はやはり、変わり果てたラナだった。
今日はゴドリック達が直接略奪に来たらしい。
「ラナちゃんお疲れさま。
やっぱり剣の腕はさすがですねぇ」
(ラナ…!元気でよかった…!)
声も発せない僕だが
夢中でラナの足下に走りこんだ
「ネズミ…?
煩いな…潰しちゃうぞ」
「可哀想ですよ。放っておきましょう」

「フィリアは動物には優しいんだね」
「人間にだって優しいですよ？
ラナちゃんの元相棒、
殺さないで帰してあげたでしょ」
「…私に相棒なんていないってば」
「ふふ…そうでしたね
…そういえばネズミにしたんだっけ？」
（僕だ…！僕だよラナ…！）

僕はラナの足元を何度か駆け回った後、
その場を離れ、彼女達が去っていくのを見送った。

（そうだ、ラナが僕に気づくわけもないんだ…）

―そして僕は、いま自分がやるべきことを思い出し、走り出す。

夜の街は建物から火の手が上がり、
その炎が瓦礫と逃げ惑う人々を照らしていた。

僕はその間を縫って走り抜け、
棄てられた露店の傍に転がっていた
新鮮なトマトをかじった。